第7回

石井至の世界放浪記

スパイ・ゾルゲ

この原稿は、レコンキスタ最後の戦いの舞台になったスペイン・グラナダで書いている。今回はスパイ・ゾルゲについて書く。

ご存じの方も多いと思うが、リヒャルト・ゾルゲ（写真）は、第二次世界大戦中に主に日本で活躍したソ連のスパイだ。一九四一年十月に朝日新聞記者・尾崎秀実などと共に国防保安法・治安維持法違反などの疑いで逮捕。一九四四年十一月に巣鴨拘置所で死刑にされた。

ゾルゲのスパイ活動の最大の成果は、一九四一年七月二日の御前会議の決定内容を探知したことだと言われている。読者の皆さんには、釈迦に説法だとは思うが、まずはそこに至る経緯を説明したい。

一九二九年十月二四日、アメリカのニューヨーク株式市場で株価が大暴落した。いわゆる「ブラック・サーズディ」である。株価指数ニューヨーク・ダウ平均は同年九月に高値三八一をつけていたが、一連の暴落により約一ヶ月で一九八まで約五割下げた。その後、一九三二年七月には四一まで下げ、ピークから約九割の下落となった。

この株価大暴落がきっかけでアメリカでは大恐慌に陥った。その後、約四年間に銀行は六千行が倒産し失業者は一千五百万人に達したとされる。当時の人口が約一億二千万人だとすると約十二％を超える失業率だったことになる。

このアメリカの大恐慌は世界に波及した。ドイツは、第一世界大戦後の経済復興を主にアメリカ資本を借りて行ってきたが、アメリカが大恐慌を受けて資本を引き揚げたため資本不足に直面し、ドイツの多くの銀行・企業が倒産した。

各国政府は景気の悪化を受けて自国の産業を保護すべく、輸入品に高い関税をかけた。一九三二年夏には、イギリスはブロック経済を形成した。いわゆるスターリング・ブロックである。本国と海外の領土や元植民地の国を一つのブロックにまとめ、そのブロック内での関税を低くする一方、ブロック外の国に対しては高関税をかけて貿易から締め出したのだ。フランスも広い海外領土を持っていたため、フラン・ブロックを形成した。

米・英・仏の「持てる国」に対し、領土、植民地、資源を「持たざる国」独・伊・日は恐慌の打撃を強烈に受け、ファシズムが台頭してきた。ファシズムは全体主義と日本語で訳され、独裁体制、自民族・国家の非合理な賛美、軍備拡大による対外侵略の三点を特徴とするとされる。

大物スパイの足跡を追う

日本では満州や大東亜共栄圏への拡大であったが、ドイツではヒトラーの「我が闘争」にあるとおり、ゲルマン民族の「生存圏」の東方への拡大として現れた。「我が闘争」では共産主義への批判も述べられている。

ドイツの「生存圏」拡大は一九三九年九月のポーランド侵攻から始まった。これが第二次世界大戦の開始だとされる。

一方、実は前月にドイツはソ連と不可侵条約を締結している。共産主義批判をし続けるドイツが、である。しかし、ドイツにとっては、ポーランドとの戦争を局地化することで英仏との戦争での二正面作戦を回避する狙いがあり、ソ連は前年からの東部国境での日本との武力紛争を抱え、対独の軍備増強に時間を必要としていたため、不可侵条約に両国の利害関係が一致したからだと言われる。

その後、一九四〇年六月にはドイツによるパリの無血占領。同年八月にはソ連は対独戦に備えバルト三国を併合。九月には日独伊の軍事同盟の結成。十二月にはヒトラーが、電撃戦を想定した対ソ作戦「バルバロッサ」の準備命令を出し、翌一九四一年四月には日ソ中立条約が締結。ソ連にとっては対独戦に備えた東方の安全確保のため、日本にとっては南進政策を推進するために北方の憂いをなくしたかったためだ。

ちなみに、木村三浩さんは、パリの無血占領の時にロンドンに亡命政府（自由フランス政府）を組織しドイツに対し抗戦を続けたフランスの将軍ド・ゴールに関心があると前に私に話していた。

このように様々な動きの中、一九四一年六月二二日、ついにドイツはソ連への攻撃を開始した。

開戦に至ったこの局面でソ連のスターリンにとっては、日本が独ソ戦に参加してくるのか否かが最大関心事になった。ドイツ軍と関東軍との挟み撃ちを恐れたのだ。

ゾルゲのスパイ活動の最大の成果は、一九四一年七月二日の御前会議の「当面、日本は独ソ戦に参戦しない」という決定を朝日新聞記者・尾崎秀実から入手し、モスクワに打診したことだとされている。諸説はあるが、ソ連はその情報を受けて、東方の軍備を移動させ対独戦に集中させたとされる。

その後、同年十月にゾルゲは逮捕。同年十二月には真珠湾攻撃が行われ太平洋戦争が始まった。

そのスパイ・ゾルゲは、一八九五年十月四日、アゼルバイジャン・バクーで生まれた。そのゾルゲの足跡を辿るために、私はアゼルバイジャンを訪問した。

石井　至（いしい・いたる）

昭和四十年、北海道生まれ。東京大学医学部卒。フランス系のインドスエズ銀行を経て、平成九年に石井兄弟社設立。同社代表取締役。金融ハイテク技術コンサルタントを行う他、東京にて幼児教室「アンテナ・プレスクール」を主宰。著書に「図解・リスクのしくみ」「バル、タパス、アルサック」など多数。